

## 【目次】

- 1 はじめに
  1. 1 この文書の目的
  1. 2 感情について
  1. 3 笑いについて
  1. 4 記号表記について
  1. 5 レトリックについて
- 2 基本的な感情
  2. 1 P Q I III系
  2. 2 I II III系
    2. 2. 1 「恐れ」と「悲しみ」
    2. 2. 2 I II III
    2. 2. 3 対立性と同調性
    2. 2. 4 「快」の表現の意味
  2. 3 p q d b系
    2. 3. 1 p q
    2. 3. 2 d b
  2. 4 2のまとめ
- 3 想像力をともなう感情
  3. 1 対事的な想像力と感情
    3. 1. 1 滑稽（対事的な側面）
    3. 1. 2 Pの分類
    3. 1. 3  $\phi$
    3. 1. 4 失望、未練、後悔など
    3. 1. 5 3. 1のまとめ
  3. 2 対人的な想像力と感情
    3. 2. 1 対人的な推測を含む感情の表記法
    3. 2. 2 滑稽（対人的な側面）
      3. 2. 2. 1 バカとコマリ
      3. 2. 2. 2 対人的な一致・不一致
      3. 2. 2. 3 笑いの二つのポイント
      3. 2. 2. 4 ボケ・ツッコミ・コマリ
      3. 2. 2. 5 バカバカしさ
      3. 2. 2. 6 対事的・対人的な成分の統合

- 3. 2. 2. 7 「可笑しさ」の事例 1
    - 3. 2. 2. 8 変な関係の分類
    - 3. 2. 2. 9 感情に関する変な現象
    - 3. 2. 2. 10 「可笑しさ」の事例 2
    - 3. 2. 2. 11 作り笑い
    - 3. 2. 2. 12 「可笑しさ」の事例 3
  - 3. 2. 3 羞恥、羨望、嫉妬、罪悪感
    - 3. 2. 3. 1 羞恥
    - 3. 2. 3. 2 d、bにかかわる感情
    - 3. 2. 3. 3 羨望・嫉妬
    - 3. 2. 3. 4 罪悪感
    - 3. 2. 3. 5 夏目漱石の小説
  - 3. 2. 4 3. 2のまとめ
- 4. 「意外性」とレトリック
  - 4. 1 ことわざの「意外性」
  - 4. 2 「意外性」と比喻
    - 4. 2. 1 直喩、隱喩、換喩、提喩
    - 4. 2. 2 換喩による「意外性」
    - 4. 2. 3 提喩による「意外性」
    - 4. 2. 4 隱喩と「意外性」1
    - 4. 2. 5 隱喩と「意外性」2
  - 4. 3 ベルクソンの笑いの理論と形象優位性
  - 4. 4 ツッコミのレトリック
    - 4. 4. 1 ツッコミの機能と分類
    - 4. 4. 2 換喩的なツッコミ
    - 4. 4. 3 隱喩的なツッコミ
    - 4. 4. 4 提喩的なツッコミ
    - 4. 4. 5 比喩的条件文によるツッコミ
    - 4. 4. 6 比喩以外の技法によるツッコミ
  - 4. 5 誤解、隱喩、説明
    - 4. 5. 1 誤解と隱喩
    - 4. 5. 2 換喩的な「説明」
    - 4. 5. 3 提喩的な「説明」
  - 4. 6 4のまとめ

## 【本文】

### 1 はじめに

#### 1. 1 この文書の目的

この文書（以下、「本書」という）では、人間の感情と想像力、およびレトリックについて考察する。

本書は、1～4の四つの部分からなり、1が前書き、2～4が本論である。そのうち、2～3で「感情」について述べ、4で「レトリック」について述べる。3～4に共通するキーワードは「想像力」である。

想像力とは、目の前にない物事を、目の前にあるかのように思い浮かべる能力のことである。感情のうちでも、「滑稽」「羞恥」「羨望」「嫉妬」「罪悪感」などの感情が成り立つためには、想像力が必要である。相手の心理に対する想像力がなければ、これらの感情は生じえないからである。

一方、レトリックが機能するためにも、想像力が必要である。ことばの言外の意味を理解するには、想像力が必要だからである。

つまり、想像力は、感情にもレトリックにも深くかかわっている。本書は、そういった想像力の作用に注目しながら、感情やレトリックについて考察を行うものである。

#### 1. 2 感情について

本書で、感情について考える際に重視するのは、感情の「社会性」である。

「羞恥」「羨望」「嫉妬」「罪悪感」などは、人間関係にかかわる感情であり、社会的に意味のある感情である。これに対し、「喜び」「怒り」「悲しみ」といった原初的な感情は、一見、社会性とは無縁な、個人的なもののように見える。

しかし実際には、それらの原初的な感情も、社会的な関係の中で、はじめて意味をもつといえる。他人がいなければ、それらを表現する意味はないからである。

この点は、人間以外の動物にも共通することである。人間以外の多くの動物でも、人間の感情表現に相当する信号が、様々の形でやりとりされ、個体間の関係を調節している(\*1)。それらの信号は、各個体の生理的な状態を反映しており、それが同時に社会的な機能も果たしている。

本書では、感情という現象を、そのような「社会性」の表現としてとらえ、考察の対象とする。2で、「喜び」「怒り」「悲しみ」「恐れ」などの基本的な感情について考察し、3で、「滑稽」「羞恥」「羨望」「嫉妬」「罪悪感」などの、より複雑な感情について考察する。

### 1. 3 笑いについて

本書には、「笑い」に関する考察も含まれている。含まれているというより、かなりの割合を占めている。

「笑い」については、古くから、多くの理論が提唱されているにもかかわらず、その本質を完全に解明した理論はまだ現れていない、といったことがいわれ続けている。

本書も「笑い」について論じる文書の一つであるが、そういった従来の「笑い」の理論を一新するような、画期的な理論を提示するものではない。

本来、どんな理論にも限界があるのは当然であり、それぞれの理論は、その限界の範囲内で有効なものである。従来の「笑い」の理論も、それぞれに有効なものであり、それが万能でないからといって、無価値なわけではない。逆に、みずから万能と称する理論が、たんなる誇大妄想にすぎないことも多い。

本書が求めるのは、「笑い」の理論の完成形ではない。本書が求めるのは、「笑い」を、それ単独で考察するのではなく、多くの感情表現の中の一部としてとら

え、感情表現の体系の中に位置づけることである。

#### 1. 4 記号表記について

本書では、感情を体系的に記述するために、ある種の記号表記を用いている。たとえば、「怒り」「恐れ」「悲しみ」という感情は、それぞれQⅠ、QⅡ、QⅢという記号で表している。

このような記号を使うのは、数学や記号論理学で行われているような、曖昧さのない、厳密な記述を行うためではない。感情という輪郭の曖昧なものを、形だけ記号化したからといって、それで曖昧さがなくなるわけではない。

本書がそのような記号を使う目的は、複数の感情の相互関係を明示することにある。たとえば、前記の三つの表記は、それらの感情が、Qという共通の成分と、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲという異質な成分からできていることを示している。つまり、このように記述することで、記述すること自体が、それらの関係を表現していることになる。

別の例を挙げると、「羞恥」と「羨望」という感情は、本書では下記のように記述している。個々の記号の意味はここでは説明しないが、この二行を見比べれば、互いに共通する部分と相違する部分があつて、それらが一定の対称性をもって組み合わせられていることがわかる。

☆(★(☆ q P) q Q) : 羞恥

☆(★(★ d P) d Q) : 羨望

本書が試みるのは、このようにして、感情という曖昧なものを、曖昧なまま、体系化してとらえることであり、記号表記はそのための手段である。

#### 1. 5 レトリックについて

本書の4では、レトリックについて言及している。レトリックには、人を説得す

る弁論術としての側面と、表現を飾る修辞法としての側面があるといわれている。本書は、主に後の側面について述べるものである。

レトリックはまた、今日では、たんに表現を飾るための技術ではなく、人間の認識の根底にある過程と考えられている。しかし、本書では、そういった高尚な問題について、正面から論じることにはしない。どちらかというと低俗な問題について、側面的な記述を行うだけである。

感情についてと同様、レトリックについても、本書では、なるべく体系的な記述をするよう努めている。それにもかかわらず、本書が求めるものは、物事の根本原理ではない。物事を多面的に眺めることで、物事の意外な性質を、わずかでも見つけることができれば、それで十分である。

## 2 基本的な感情

2 では、基本的な感情について概観し、それらに、本書特有の記号を割り当てていく。

### 2. 1 P Q I III系

人間の場合、感情を表現する信号として、身ぶりや音声以外に、顔の表情が大きな役割を果たしている。

心理学者の山田寛さんによれば、顔の表情の中で、口の曲がり具合は「快—不快」を表す信号としてはたらくという。たとえば、口角の上がった「U」形の口は「快」を、口角の下がった「∩」形の口は「不快」を表すという(\*1)。

これに対し、眉や目の形は「攻撃性—親和性」を表す信号としてはたらくと考えられる。たとえば、目尻の上がった「\ /」形の眉や目は「攻撃性」を、目尻の下がった「/ \」形の眉や目は「親和性」を表すと考えられる。

ただし、口の形と「快—不快」の相関は、山田さんらの研究によって実証されているのに対し、眉や目の形と「攻撃性—親和性」の相関は、実証されているわけではない。

しかし、実証できるかどうかは別として、「攻撃性—親和性」という対立概念が、人間の感情を考える上で、重要なものであるという考えには、妥当性があると思われる。「攻撃性」やそれに関連する表現は、人間以外の多くの動物にも、広く認められるものだからである(\*2)。

そこで、図2-1のように、「快—不快」「攻撃性—親和性」という二つの座標軸を交差させて一つの座標系を作る。そこに、上記のような眉目の形と口の形を組み合わせることで四つの「表情」を作り、配置する。すると、それらは、図2-2に示すように、「怒り」「嘲り」「悲しみ」「親しみ」を表す表情と見ることがができる。

図 2-1 表情

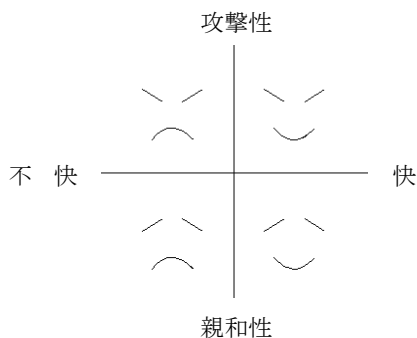


図 2-2 感情語

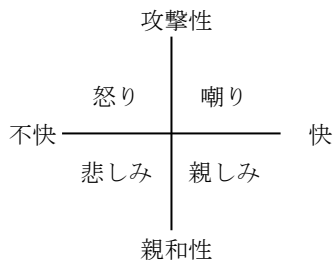
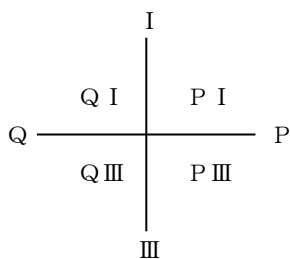


図 2-3 記号



このことから、「怒り」は「不快」と「攻撃性」、「嘲り」は「快」と「攻撃性」、「悲しみ」は「不快」と「親和性」、「親しみ」は「快」と「親和性」の結合した感情と見ることができる。

そこで、「快」をP、「不快」をQ、「攻撃性」をI、「親和性」をⅢという記号で表すとすると、図2-3のように、「怒り」はQ I、「嘲り」はP I、「悲しみ」はQ Ⅲ、「親しみ」はP Ⅲと表すことができる。IとⅢがあって、Ⅱがないが、これについては2. 2で述べる。

#### 4. 想像力とレトリック

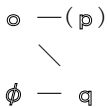
4では、3. 1で述べた「滑稽」という現象の対事的側面について補足する。ここで述べることは、レトリックと深くかかわっている。

「滑稽」という現象の基盤には、3. 1. 1で述べたように、「意外性」がある。4. 2では、そのような「意外性」と比喻表現の関係について述べる。4. 3で、比喻以外の表現と「意外性」の関係について述べた後、4. 4では、会話において、「意外性」がどう処理されるかについて述べる。

その前に、4. 1では、ことわざについて述べる。「意外性」は、「滑稽」という現象だけにかかわるものではない。ことわざに表現された「意外性」について、簡単に述べておく。

##### 4. 1 ことわざの「意外性」

ことわざには、下記のような $\circ \ p \ \phi \ q$ 型の思考形式がよく見られる。 $p$ や $q$ の部分は、 $d$ や $b$ になることもある。



以下の例は、ことわざのいくつかを、上記の図式に当てはめて表記したものである。このうち、括弧内の部分は、ことばにはされていないが、想像で補うことができる部分である。

たとえば、(1)のことわざの裏には、犬は、ふつうの条件では「棒に当たらない」という前提が含まれている。それに対し、「歩く」という条件の加わった犬は、「棒に当たる」という意外な現象を引き起こすことが主張されている。他のことわざについても同様の説明ができる。

(1) 犬も歩けば棒に当たる

犬（ ― は ― 棒に当たらない ）

＼

も

＼

歩け ― ば ― 棒に当たる

(2) 塵も積もれば山となる

塵 （ ― は ― 小さなものだ ）

＼

も

＼

積もれ ― ば ― (大きな) 山となる

(3) 猿も木から落ちる

猿 （ ― は ― 木から落ちない ）

＼

も

＼

(ときに ― は) ― 木から落ちる

(4) 腐っても鯛

腐って（ ― は ― 値打ちがない ）

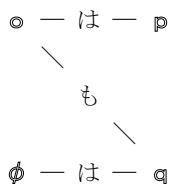
＼

も

＼

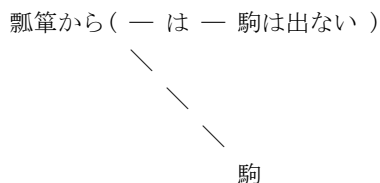
鯛 （ ― は ― 値打ちがある ）

以上のように、ことわざでは、多くの場合、係助詞の「は」と「も」が、論理の方向を切り換えるはたらきをする。接続助詞の「ば」は、「は」と同系統のことばであり、「は」と同様のはたらきをする。

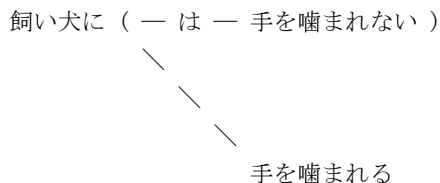


しかし、「意外性」を示すことわざの中には、上記のように、物事を一般論として述べるのではなく、下記のように、状況描写として述べるタイプのことわざもある。このような場合、「も」は使われにくい。

#### (5) 瓢箪から駒



#### (6) 飼い犬に手を噛まれる



### 4. 2 「意外性」と比喻

3. 1. 1 で示した「意外性」という認知形式は、レトリックの技法と一定の関係をもっている。4. 2 ではそのことについて述べる。

4. 2 で論じるのは、レトリックのうちでも、比喻である。比喻とは、一言でい

えば、「文字どおりではない」意味をもつ表現である。「文字どおりでない」意味のことばを理解するには、想像力が必要である。その点で、「意外性」のような、想像力を要する認知形式と共通の性質がある。

#### 4. 2. 1 直喩、隠喩、換喩、提喩

代表的な比喩の技法である、直喩（シミリー）、隠喩（メタファー）、換喩（メトニミー）、提喩（シネクドキ）について、まず説明する。これらの用語の定義については、専門家の間でいろいろな議論があるようであるが、そういった問題には深入りせず、必要最小限の説明をするにとどめる。

直喩と隠喩は、何らかの共通点に基づいて、あるものを別のものにたとえる技法である。あるものを  $p$ 、たとえるものを  $q$ 、その共通点を  $\circ$  とするとき、 $\circ$  の部分を明示するのが直喩、明示しないのが隠喩と見ることができる。

下記の例でいえば、（１）が普通の文、（２）が直喩の文、（３）（４）が隠喩の文である。（２）～（４）では、いずれも  $p$ （手）が  $q$ （氷）にたとえられているが、（２）では  $\circ$ （冷たい）が明示されているのに対し、（３）（４）ではそれが明示されていない。

- （１）彼女の手は冷たかった。
- （２）彼女の手は氷のように冷たかった。
- （３）彼女の手は氷のようだった。
- （４）彼女の手は氷だった。

$p$  = 手、 $q$  = 氷、 $\circ$  = 冷たい

ただし、（３）については、直喩と見る見方と隠喩と見る見方がある。おそらく直喩と見る方が一般的であるが、ここでは隠喩と見ることにする。（３）では  $\circ$  が明示されていないからである。しかし、「のよう」ということばによって、それが比喩であることは明示されている。そのような隠喩は、「標識隠喩」と呼ばれることがある（\*1）。

しかし、(3)のような表現を直喩と見るか隠喩と見るかは、以下の議論にはほとんど関係がない。説明の都合上、とりあえずは直喩と隠喩を区別したが、以下では、直喩と隠喩をとくに区別せず、同類のものとして扱う。

いずれにしても、直喩と隠喩は、上記のように、 $\odot$ 、 $p$ 、 $q$ の三者関係にかかわる表現といえるが、換喩と提喩は、下記のように、 $\odot$ 、 $p$ の二者関係にかかわる表現といえる。

換喩は、 $\odot$ を明示して $p$ を暗示する表現において、 $\odot$ と $p$ が「部分と全体」の関係、あるいは「隣接関係」にある場合をいう。この場合の「隣接関係」というのは、空間的な隣接関係のほか、時間的な前後関係や因果関係、社会的な近縁関係などを含むものである。

提喩は、 $\odot$ を明示して $p$ を暗示する表現において、 $\odot$ と $p$ に概念上の包含関係がある場合をいう。概念上の包含関係とは「特殊と一般」の関係ということもできる。

ただし、換喩と提喩の定義については諸説があり、提喩を換喩の一種と見る立場もあれば、換喩と提喩を別のものとして区別する立場もある。本書では、換喩と提喩を区別する立場(\*2)(\*3)をとる。

下記の(5)(6)が換喩の例、(7)(8)が提喩の例である。(5)～(8)では、それぞれ、 $\odot$ ということばが $p$ という意味を暗示している。 $p$ の内容は文脈によって変わりうるが、代表的と思われる例を挙げている。

(5) 彼女が久しぶりに口を開いた。

$\odot$  = 口を開く、 $p$  = 話す

(6) 彼女はひとりで鍋を楽しんだ。

$\odot$  = 鍋、 $p$  = 鍋料理

(7) 彼女はその石の妖しい光に魅了された。

$\odot$  = 石、 $p$  = 宝石

(8) 彼女の決意は石のようだった。

○ = 石、p = 固いもの

(5) では、○ (口を開く) と p (話す) に時間的な隣接関係があり、「先行事態」で「後続事態」をたとえる換喩と見られる。あるいは、○ (口を開く) という行為を、p (話す) という行為の一部と見た場合には、「部分」で「全体」をたとえる換喩と見ることもできる。いずれにしても換喩である。

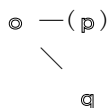
(6) の○ (鍋) と p (鍋料理) には、空間的な隣接関係がある。また、「鍋」を「鍋料理」の構成要素と見れば、「部分」で「全体」をたとえる換喩と見ることもできる。

(7) (8) では、同じ「石」ということばで、一方はその下位概念を表し、他方は上位概念を表している。すなわち、(7) では○ (石) ⊃ p (宝石)、(8) では○ (石) ⊃ p (固いもの) である。いいかえれば、(7) は「一般」で「特殊」を表す提喩、(8) は「特殊」で「一般」を表す提喩である。

なお、(8) の表現は隠喩ともいえる。グループ  $\mu$  という研究者集団の考え(\*4)によれば、隠喩は提喩の一種と見ることができる。したがって、(8) を隠喩と見る見方と提喩と見る見方は矛盾しない。この点については、4. 2. 5でもふれる。

#### 4. 2. 2 換喩による「意外性」

3. 1. 1でも述べたように、下記のように表される形式を、本書では「意外性」と呼んでいる。このうち、○—(p)の部分は、換喩または提喩の関係になっている。「意外性」とは、この○—(p)の関係を否定し、○—qの関係を肯定するものである。



このように、「意外性」は、換喩や提喩に基づくものである。それは滑稽（コミック）が生じるための必要条件でもある。換喩とコミックの密接な関係については、美学研究者の樋口桂子さんによる指摘がある（\*1）。本書もその考えを踏襲するものである。

ここで、4. 2. 1 で示した例文を、あらためて（1）として記す。この文末の「口を開いた」は、ふつうは「話した」を意味する換喩としてはたらく。

（1）彼女が久しぶりに口を開いた。

○＝口を開く、p＝話す

ところが、次の（2）では「あくびをした」という語句が現れて、上の p の意味を否定している。このようなものが「意外性」である。

（2）彼女が久しぶりに口を開いた。あくびをしたのだ。

○＝口を開く、p＝話す、q＝あくびをする

下記の（4）も「意外性」の文例である。（3）の文の「鍋」は「鍋料理」を想像させるが、（4）では、それが否定されて、鍋そのものが好きなことを示す文になっている。

（3）彼女はひとりで鍋を楽しんだ。

○＝鍋、p＝鍋料理

（4）彼女はひとりで鍋を楽しんだ。いろんな鍋を手にとっては眺めていた。

○＝鍋、p＝鍋料理、q＝鍋そのもの

#### 4. 2. 3 提喩による「意外性」

「意外性」には、換喩に基づくもののほかに、提喩に基づくものもある。

4. 2. 1 で示した例文を、あらためて下記の (1) として記す。この文中にある「石」は、たとえば「宝石」を想像させる。

(1) 彼女はその石の妖しい光に魅了された。

$\circ$  = 石、 $p$  = 宝石

ところが、次の例では、それを否定するような文が現れている。

(2) 彼女はその石の妖しい光に魅了された。すばらしい墓石だった。

$\circ$  = 石、 $p$  = 宝石、 $q$  = 墓石 ( $\circ \supset p$ 、 $\circ \supset q$ )

$p$ 、 $q$  は、それぞれ  $\circ$  の集合に含まれるので、これは提喩に基づく「意外性」と見ることができる。

次の例も、提喩的な「意外性」を示すものといえる。 $p$ 、 $q$  が、それぞれ  $\circ$  の上位概念である場合の例である。

(3) 彼女の決意は石のようだった。

変な形の石で、どうころがるものかわからなかった。

$\circ$  = 石、 $p$  = 固いもの、 $q$  = ころがるもの ( $\circ \subset p$ 、 $\circ \subset q$ )

以上のように、換喩や提喩は、想像力を利用した表現なので、その想像を裏切る表現もまた、つねに可能である。

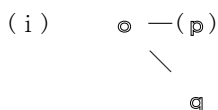
#### 4. 2. 4 隠喩と「意外性」1

4. 2. 4 と 4. 2. 5 では、隠喩と「意外性」の関係について述べる。4. 2. 4 では、隠喩と「意外性」に、ある種の対照的な性質があることを述べる。その

一方で、4. 2. 5では、隠喩と「意外性」には互いに随伴する性質があることを述べる。

換喩と提喩が二者関係からなるのに対し、隠喩と「意外性」は三者関係からなるという共通点がある。このことを前提に、両者の比較を行う。

まず、「意外性」の方は、4. 2. 2等で見たように、次の図式で表すことができる。



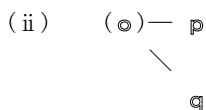
次に、隠喩をどのような図式で表すべきかを考えるため、4. 2. 1で示した例文を、あらためて(1)として示す。

(1) 彼女の手は氷のようだった。

$p$  = 手、 $q$  = 氷、 $\circ$  = 冷たい

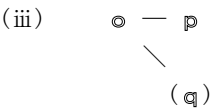
$\circ$ 、 $p$ 、 $q$ の各要素のうち、本書では、想像の部分に括弧を付けて表しているが、どれを想像と見、どれを現実と見るかは、どこに視点を置くかによって変わってくる。

たとえば、(1)の文では、 $p$ と $q$ が明示され、 $\circ$ が暗示されている。 $\circ$ は、明示されていない以上、上記の意味に限定されるものではないが、仮に代表例として挙げておく。いずれにしても、この観点からすると、(1)は(ii)のように表すことができる。



しかし、 $p$ 、 $q$ のうち、話者の前に、現実存在するのは $p$ であり、 $q$ は想像さ

れたものにすぎない、という点からいえば、下記のように表すこともできる。



(i)と(iii)は、対照的な図式であり、違いがわかりやすいので、以下では、「意外性」は(i)の図式、隠喩は(iii)の図式で表すことにする。しかし、隠喩と「意外性」の違いを表すには、この図式だけでは十分ではない。

前述のように、p、qが、想像か現実かということは、視点の置き方によって変わってくるので、それによって、隠喩と「意外性」を区別することには問題がある。その点については4. 5. 1で説明する。隠喩と「意外性」を区別するのは、p、qが想像か現実かということより、p、qの成立が、両立的か排他的かということである。

「意外性」の場合は、pが否定され、qが肯定されるので、両者の成立は排他的である。これに対し、隠喩の場合は、pはpであると同時に、qの性質ももつので、両者は両立的といえる。したがって、「意外性」と隠喩の関係は、下のようになまとめられる。

|   | ○ p、○ q の関係 | p、q の成立 | 技法        |
|---|-------------|---------|-----------|
| A | 換喩          | 排他的     | 換喩的な「意外性」 |
| B | 換喩          | 両立的     | (換喩的な隠喩)  |
| C | 提喩          | 排他的     | 提喩的な「意外性」 |
| D | 提喩          | 両立的     | 隠喩        |

この表によれば、隠喩はD、「意外性」はAまたはCの形式に相当する。残りのBについては、適当な呼び名がないので、仮に「換喩的な隠喩」としているが、この実例は4. 4. 3で示す。

4. 2. 5 隠喩と「意外性」2

ここでは、隠喩の背後に「意外性」が隠れている場合について述べる。

下記（１）の隠喩の文は、４．２．４で示したように表すこともできるが、下記のような「意外性」の文として表すこともできる。つまり、彼女の手が「冷たい」ということが意外であって、それが「氷」を想像させるという図式である。この図式においては、 $q \circ (\phi)$ の部分が隠喩の関係を表している。

(1) 彼女の手は氷のようだった。

(2)

$$\begin{array}{ccc} \circ & - & (p) \\ & \diagdown & \\ (\phi) & - & q \end{array}$$

$\circ$  = 手、 $p$  = 温かい

$\phi$  = 氷、 $q$  = 冷たい

４．２．１で参照したグループ  $\mu$  の見解によれば、隠喩は、二つの提喩の組み合わせと考えることができる(\*1)。上記の例でいえば、 $\circ \subset q$ 、 $\phi \subset q$  という関係は、それぞれ提喩であり、それらが組み合わせることができる  $q \circ (\phi)$  という関係は隠喩である。

一方、 $\circ(p)q$  の関係は「意外性」である。この場合、「手」が「温かいもの」であるという認識、すなわち、 $\circ \subset p$  の認識が否定されて、「手」が「冷たいもの」であるという認識、すなわち、 $\circ \subset q$  の認識が肯定されている。したがってこれは、４．２．３で見たような、提喩的な「意外性」に当たるものである。

したがって、(2) の構造は、隠喩と「意外性」が、背中合わせの形になったものということができる。このように、隠喩は、その背後に、提喩的な「意外性」をともなっている。

#### ４．３ ベルクソンの笑いの理論と形象優位性

4. 2では、比喩と「意外性」の関係について述べたが、4. 3では、比喩以外のレトリックで、「意外性」と関係するものについて、ベルクソン氏の笑いの理論と関連させながら述べる。

数ある「笑いの理論」の中でも、哲学者のアンリ・ベルクソン氏の理論には、独特の感触がある。通常の「笑いの理論」が、たんに抽象的な概念で笑いを説明しているだけなのに対し、氏の理論は、具体的なイメージを喚起するからである。理論が正しいとか正しくないとかいうこと以前に、そういったイメージの具体性が魅力的である。

ベルクソン氏によれば、笑いとは、流動的であるべき生の中にまぎれこんだ硬直性（こわばり）が引き起こすものであり、とくに人間の、機械を思わせるような挙動は、格好の笑いの対象となるということである(\*1)。

たとえば、人は人の話を聞くとときに、軽く首を縦に振ることがあり、これは「うなずき」という行為として理解される。しかし、その首を振るタイミングが話とずれていたり、首の振り方があまりに速かったりすると、そこに「おかしさ」が生じる。これは、人間の、機械を思わせる挙動の一例である。

そのような状況は、たとえば、次の(1)のように表される。これは4. 2. 5で見た、隠喩を表す図式であるが、重要なのはこの点ではなく、この後に述べる点である。

$$(1) \quad \begin{array}{c} \circ - (p) \\ \quad \backslash \\ (\phi) - q \end{array}$$

$\circ$  = 人、  $p$  = 普通で速度で首を振る

$\phi$  = 機械、  $q$  = 異常な速度で首を振る

ふつう、人の動きを見ている人は、動き自体よりも、動きの意味に注意を向ける。たとえば、会話中の人間の首振り動作は、前述のように、「うなずき」という意味をもつものとして理解される。

ところが、人が奇妙な動きをするのを見ている人は、動きの意味よりも、動き自体に注意が向いてしまう。上記の例であれば、相手の首の振り方が異常に速いために、「うなずき」という意味よりも、首の動き自体に目を奪われてしまうことになる。

したがって、(1)における  $p$ 、 $q$  という動作の意味を、それぞれ  $p'$ 、 $q'$  とすると、 $p$  と  $p'$  に関しては  $p'$  の部分が焦点化されるのに対し、 $q$  と  $q'$  に関しては  $q$  の部分が焦点化されると考えられる。このことは(2)のように表すことができる。(2)では、下線が焦点の位置を表している。

$$(2) \quad \begin{array}{c} \circ - (p \underline{p}') \\ \quad \diagdown \\ (\phi) - \underline{q} q' \end{array}$$

$\circ$  = 人、 $p$  = 普通で速度で首を振る、 $p'$  = うなずく  
 $\phi$  = 機械、 $q$  = 異常な速度で首を振る、 $q'$  = うなずく

このような現象は、「意味」から「形象」への焦点の転位と呼ぶことができる。日常生活では、ふつうは「意味」が意識の上位にあって、「形象」は意識の下位にある。しかし、上記のような場合には、「形象」が意識の上位にくると考えられる。

そのような「形象」に注意を集める技法は、詩や演劇でもおなじみのものである。詩に使われるレトリックには、「比喩」のような、ことばの意味にかかわる技法もあるが、「反復」や「対句」のような、ことばの形態に特徴のある技法も多い。同様に、喜劇にも、「反復」や「取り違え」のような、形態に特徴のある技法がある。

というより、詩や演劇は、近代以前には、韻文や儀式的な動作からなる芸能としてしか存在しておらず、そういった「形象」優位の姿こそが、本来の姿であると考えられることもできる。

ベルクソン氏の理論では、そのような硬直した「形象」は、流動的な「生」と対立するものと考えられている。しかし、その硬直性こそが「生」を流動化する要

因と考えることもできる。

#### 4. 4 ツッコミのレトリック

4. 4では、会話で生じる「意外性」を、ツッコミがどう処理するかについて分析する。

3. 2. 2. 4で紹介したように、社会学者の大島希巳江さんによれば、日本では、一人語り型のジョークによる笑いより、漫才のような、会話による笑いが好まれる(\*1)。そのような会話型の笑いにまつわる現象を、3. 2. 2では感情面に注目して分析したが、以下では認識面に注目して分析を行う。

##### 4. 4. 1 ツッコミの機能と分類

漫才など、会話型のお笑い芸で行われるツッコミには、「認識の表示」と「感情の表示」という二つの機能がある。3. 2. 2. 4で述べたのは、そのうちの「感情の表示」についてである。

ツッコミを、表示される感情のタイプによって分類すると、怒りのツッコミ、嘲りのツッコミ、冷静なツッコミなどに分けられる。3. 2. 2. 4で述べたように、怒りのツッコミは、「不快」を表示するという点で、コマリとの共通性がある。

一方、ツッコミを、表示される認識のタイプによって分類すると、換喩的なツッコミ、隠喩的なツッコミ、提喩的なツッコミなどに分けられる。ただし、4. 2. 1で述べたように、隠喩は、提喩の一種と見ることもできる。したがって、大別すると、ツッコミは、換喩的なツッコミと提喩的なツッコミの二つに分けられることになる。

以下の議論でも、ツッコミを、換喩的なツッコミ、提喩的なツッコミなどに分けて論じる。しかし、実際のツッコミでは、この両者が複合してはたらいっていると考えられる。

つまり、個々のツッコミが、換喩と提喩のどちらか一方に分類されるというのではなく、どのツッコミにも、換喩的な作用と提喩的な作用の両面があって、その中で、換喩的な性格の強いものと、提喩的な性格の強いものがあるということである。

換喩的なツッコミとは、事態の焦点化を行うものである。それは、一連の事態から、「意外性」のある部分を摘出し、明示するはたらきをする。

提喩的なツッコミとは、事態の概念化を行うものである。それは、「意外性」のある部分を、別の概念に置き換えるはたらきをする。

いずれにしても、ツッコミは、「意外性」にかかわるアクションであるが、相手が生成した「意外性」に対して反応する場合と、自分自身が「意外性」を生成する場合とがある。どちらかという、換喩的なツッコミには前者の傾向、提喩的なツッコミには後者の傾向があるが、一概にはいえない面もある。

#### 4. 4. 2 換喩的なツッコミ

##### 4. 4. 2. 1 換喩的なツッコミの概要

3. 2. 2. 6で述べたように、「滑稽」な状況は、下記の(1)または(2)のような図式で表すことができる。(1)は、事態の関係だけを示したものであり、(2)は、それに人物の感情を加えて示したものである。☆、★は人物を、u、v、x、yは感情を表している。

$$\begin{array}{l}
 (1) \quad \circ - (p) \\
 \quad \quad \quad \backslash \\
 \quad \quad \phi - q
 \end{array}$$

$$\begin{array}{l}
 (2) \quad \circ - (\star(\star(p \ u) \ v)) \\
 \quad \quad \quad \backslash \\
 \quad \quad \phi - \star(\star(q \ x) \ y)
 \end{array}$$

このような構造から、その一部の要素を切り出して提示するツッコミを「換喩的なツッコミ」と呼ぶことにする。 $p$ 、 $q$ が提示される場合が多いが、その他の要素が提示されることもある。具体例は4. 4. 2. 2以下で示す。

換喩的なツッコミでは、基本的に、 $p$ は肯定的に、 $q$ は否定的に捉えられる。したがって、 $p$ 、 $q$ を提示するときに、次のような文型が使われることが多い。ただし、これは、事態をどの視点から眺めるかによっても変わってくる。

- $p$ の提示：肯定文（～だよ）、推量文（～だろう）、  
否定疑問文（～じゃないか）、命令文（～しろよ）など
- $q$ の提示：疑問文（～かよ）、否定文（～じゃないよ）、  
否定推量文（～じゃないだろう）、禁止文（～するなよ）など

そのようなツッコミに、指示詞、疑問詞、人称代名詞などが使われることもある。そのような例については、4. 4. 2. 3～4. 4. 2. 7で述べる。

ツッコミの多くは $p$ 、 $q$ の対比を暗示するものであるが、 $d$ 、 $b$ の対比を暗示するようなものもある。これについては4. 4. 2. 8で述べる。

#### 4. 4. 2. 2 各要素の提示例

以下に、漫才風の会話文における換喩的なツッコミの事例を示す。関西弁風に書いているが、そのことにとくに深い意味はない。

下記の（1 a）～（1 c）では、1～2行目が共通で、いわゆる前フリとボケに当たる部分となっている。前フリは $\circ$ を提示し、ボケは $q$ を提示する。これに対して、3行目以降がツッコミである。1～2行目で形成された「意外性」の構造、すなわち $\circ$ （ $p$ ） $q$ のうちから、どれかの要素を選んで再提示するか、あるいは、 $\phi$ を新たに提示する形になっている。

（1a）

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ああ、知ってる。お前を大嫌いな女やろ」

☆「あほか、嫌いなわけないやろ」 :  $q$  の否定

(1b)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ああ、知ってる。お前を大嫌いな女やろ」

☆「あほか、めっちゃめっちゃ好きやっちゅうねん」 :  $p$  の提示

(1c)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ああ、知ってる。お前を大嫌いな女やろ」

☆「あほか、彼女やいうとるやろ。 :  $\circ$  の提示

確かにこの写真は、ちょっと顔そむけてるけど」 :  $\phi$  の提示

$\circ$  — ( $p$ )

＼

$\phi$  —  $q$

$\circ$  = 彼女、  $p$  = ☆が大好き

$\phi$  = 顔をそむけている、  $q$  = ☆が大嫌い

(ii) 心理の表示

下記の(2)は、 $p$ 、 $q$ といった事態のほかに、 $x$ 、 $y$ 、 $u$ 、 $v$ といった心理的な要素が提示されている例である。この例の場合、事態に対する反応の方に「意外性」があって、事態自体には「意外性」がないので、 $p = q$ としている。

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ええ一つ。お前に彼女なんかおるんか」

☆「驚きすぎやろ。 :  $x$  の提示

感じ悪いな」 :  $y$  の提示

★「彼女いうて、人間か」

☆「人間じゃ。 :  $p = q$  の提示

あたりまえやろ」

:  $u = v$  の提示

○  $\neg(\star(\mathfrak{p} u) v)$

＼

$\star(\mathfrak{q} x) y$

○ =  $\star$ 、 $\mathfrak{p} = \mathfrak{q}$  = 人間の彼女がいる

$u = v = \mathfrak{p}$  - (普通)

$x = \mathfrak{q}$  - (驚き)、 $y = \mathfrak{q} Q$  (不愉快)

#### 4. 4. 2. 3 指示詞の使用例 1

各成分の提示が、指示詞や疑問詞を使って行われることも多い。指示詞には、「これ」「それ」「あれ」など、コ系、ソ系、ア系のことばがある。下記の(1)～(3)では、いずれも  $\mathfrak{q}$  に当たる部分がソ系の指示詞で表されている。ただし、(1)(2)と(3)では、指示詞の用法が多少異なっている。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「うわ、可愛いなあ」

☆「そやろ」

★「めっちゃ可愛いやん、この犬」

☆「そっちかい」

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「うわ、きれいな夕焼けやなあ」

☆「そこかい」

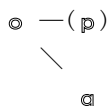
(3)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ほう、天王寺動物園におったゴリラにそっくりやな」

☆「あほか、天王寺におったことなんか、ないわ」

★「そっちを否定するんかい。ゴリラの方を否定せえよ」



- (1) o = 可愛い、p = 彼女、q = 犬（そっち）
- (2) o = きれい、p = 彼女、q = 夕焼け（そこ）
- (3) o = 否定する、p = ゴリラとの類似、q = 天王寺にいたこと（そっち）

指示詞の用法には、会話が行われている現場にあるものを指し示す用法（現場指示用法）と、会話の文脈に現れたものを指し示す用法（文脈指示用法）があるといわれている。

上記の例でいえば、（１）（２）の「そっち」や「そこ」が指しているのは、「犬」（の写真）や「夕焼け」（の写真）であり、つまり、その場にあるものである。一方、（３）の「そっち」が指している「天王寺にいたこと」は、その話の中に出てきたことである。したがって、（１）（２）が現場指示用法、（３）が文脈指示用法に相当する。

現場指示的な用法では、コ系の指示詞とソ系の指示詞が、対比的にはたらくことが多い。上記には、ソ系の指示詞の例しかないが、一般的には、コ系の指示詞で p を、ソ系の指示詞で q を表すことが多い。また、コ系の指示詞で自分の判断を、ソ系の指示詞で相手の判断を示すことも多い。

これに対し、文脈指示的な用法では、必ずしもコ系、ソ系の対比にはならない。たとえば、（３）のような状況では、q をソ系のことばで表すことはできるが、p をコ系のことばで表すことはできない。

#### 4. 4. 2. 4 指示詞の使用例 2

次に示すのは、指示詞の文脈指示的な用法の例である。（１）（２）の場合とも、先行文脈の中から、トピックとなる部分を「それ」ということばで切り出して、

そこにコメントを付加する形がとられている。

(1)

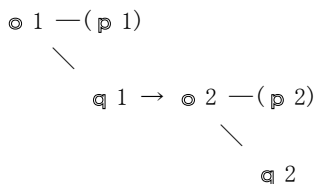
☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ふーん」

☆「めっちゃきれいやろ」

★「どうしてもええけど、お前、うんこ踏んどるで」

☆「うわっ、それ先言わんかい」 : ◎ 2、p 2 の提示



◎ 1=☆、p 1=彼女の写真を見せる、q 1=うんこを踏んでいる

◎ 2=うんこを踏んでいること（それ）、p 2=先に言う、q 2=後で言う

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

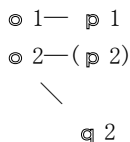
★「うわ、彼女の連れてる犬、ブサイクやなあ」

☆「なんやと。彼女の犬がブサイクなわけないやろ」

★「よう見たら、彼女もブサイクやなあ」

☆「まあな」

★「それは認めるんかい」 : ◎ 2、q 2 の提示



◎ 1=彼女の犬がブサイクという主張、p 1=憤慨する

◎ 2=彼女がブサイクという主張（それ）、p 2=憤慨する、q 2=容認する

## 4. 4. 2. 5 疑問詞の使用例

疑問詞には、「どれ」「どこ」など、ド系のもののほか、「なに」「いつ」などがある。問題のある部分を、名指しせずに疑問詞で示すことで、かえってそこを焦点化する効果がある。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「なんやこれ」

☆「彼女の鎖骨や」

★「どこ撮ってんねん」

○＝彼女を撮る、p＝顔などを撮る、q＝鎖骨（どこ）を撮る

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「なかなか、はっきりした顔だちやな」

☆「うん、衛星写真でもわかるからな」

★「どんだけはっきりしてんねん」

○＝彼女の顔、p＝衛星写真でわかるほどははっきりしていない

q＝衛星写真でわかるほど（どれだけ）はっきりしている

(3)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「おお、ええ女やないか。おれ、この女と結婚するわ」

☆「なんでやねん」

○＝彼女、p＝☆とつきあっている

φ＝なぜ、q＝★と結婚する

疑問詞を使ったツッコミは、4. 4. 4. 3で示すように、提喻的なツッコミの一種と見ることもできる。

## 4. 4. 2. 6 人称代名詞の使用例 1

ツッコミに人称代名詞が使われることもある。とくに一人称や二人称の代名詞は「現場指示」性が強いので、そのような場合、会話の内容が、会話が行われている現場と結びつけられる。

(1)

- ☆「これが**ぼく**の彼女の写真やねん」
- ★「うわ、隣におる**おっさん**、**ブサイク**やなあ」
- ☆「それ、わしやがな」

○＝ブサイク、p＝おっさん、q＝☆（わし）

(2)

- ☆「これが**ぼく**の彼女の写真やねん」
- ★「ふーん」
- ☆「こんな女のどこがええんやろ」
- ★「知るか。お前の彼女やろ」

○＝☆（お前）の彼女、p＝よさがわかる、q＝よさがわからない

## 4. 4. 2. 7 人称代名詞の使用例 2

下記は、文脈指示的なソ系の指示詞と人称代名詞によって、4. 4. 2. 6の場合と同様、会話の内容と会話の現場とが、結びつけられている例である。ただし、人称代名詞は、自明な場合は省略されることがある。下記の例の括弧内は省略されやすい部分である。

(1)

- ☆「これが**ぼく**の彼女の写真やねん」
- ★「ああ、知ってる。この女、背中に苔はえてるらしいな」

☆「そんな話、（お前は）どこで聞いてん」

- 1=彼女、p 1=背中に苔がはえてない、q 1=背中に苔がはえている
- 2=★、p 2=q 1のことを聞いてない、q 2=q 1のことを聞いた

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「あれっ、お前が好きなん、おれのオカンとちごたんか」

☆「なんでやねん。（そんなことをいうお前は）頭おかしいんか」

- 1=☆、p 1=写真の彼女が好き、q 1=★の母が好き
- 2=★、p 2=○ 1 p 1を主張する、q 2=○ 1 q 1を主張する
- φ=頭がおかしい

4. 4. 2. 6の例では、人称代名詞の部分がツッコミの要点であったのに対し、  
4. 4. 2. 7の例では、人称代名詞の部分がツッコミの要点ではないため、それを省略することができると考えられる。

4. 4. 2. 8 d、bの対比を示す事例

ツッコミが、p、qよりむしろd、bの対比を暗示する場合もある。

2. 3で述べたように、p、q、d、bはそれぞれ、「ふつう」「変」「良い」「悪い」という評価を表す記号である。3. 2. 2. 6で述べたように、それらが事態を表すときには白抜き文字で、心理を表すときには通常の文字で表す。

下記の(1)は、3. 1. 4で見たように、「失望」や「落胆」を表す図式である。これに対し、(2)は、(1)の構造を二人で分担する形になっている。

これは、通常ならb Q（不快）を感じるべき事態に対して、★がそれを感じず、☆だけがb Qを感じる状態を表している。このような場合に、(3) (4)のようなツッコミが行われる。相手のdという評価に対して、自分のbという評価を通知するものである。

(1)    ○ —(d d P)  
          \  
             b b Q

(2)    ○ —(☆(★(d d P) d P))  
          \  
             ☆(★(b d P) b Q)

(3)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ほう、なかなかきれいな人やないか」

☆「そやねん。顔はべっぴんやし、旦那はヤクザやねん」

★「あかんがな」

○ = 顔はべっぴん、d = 顔以外にも良いところがある、b = 旦那はヤクザ

(4)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ふーん。言うたら悪いけど、なんかイマイチやなあ」

☆「いや、見た感じ、顔はブサイクやけど、心は鬼やねん」

★「ええとこ、あらへんがな」

○ = 顔はブサイク、d = 顔以外で良いところがある、b = 心は鬼

#### 4. 4. 2. 9 描写的なツッコミ

ツッコミには、過大な感情を表さず、事態や心理を描写するだけのものもある。似たようなものとして、相手のことばを引用するだけのものもある。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「唇かさかさやな」

: 事物の描写

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ふーん。なんやろな、このいやな気分は」 : 心理の描写

(3)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「…………… きれいな人やね」

☆「だいぶ間があいたな」 : 反応の描写

(4)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「だれも写ってへんやん」

☆「あれ、きのうは写とったんやけどなあ」

★「きのうは、て」 : 引用

(1) ○=彼女、p=唇しっとり、q=唇かさかさ

(2) ○=彼女の写真、p=ふつうの気分、q=いやな気分

(3) ○=賛辞をいう、p=ためらいがない、q=ためらいがある

(4) ○=だれも写ってない、p=ずっと写ってない、q=きのうは写っていた

## 4. 4. 3 隠喩的なツッコミ

隠喩は、嘲りのツッコミとして使われることがよくある。下記の(1)の2行目は、隠喩的なツッコミといえる。(2)の3行目も、隠喩に近い表現といえる。どちらも、後の(i)または(ii)の図式で表すことができる。

(1)

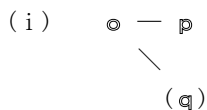
☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「なんやこの顔、鬼瓦か」

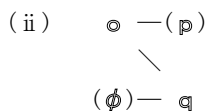
(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

- ★「こらまた、えらい顔やなあ。  
この顔で猫ぐらい殺せそうやなあ」



- (1)  $\circ$  = すごい、 $p$  = 顔、 $q$  = 鬼瓦  
(2)  $\circ$  = すごい、 $p$  = 顔、 $q$  = 猫ぐらい殺せそう



- (1)  $\circ$  = 顔、 $p$  = ふつう  
 $\phi$  = 鬼瓦、 $q$  = すごい  
(2)  $\circ$  = 顔、 $p$  = ふつう  
 $\phi$  = 猫ぐらい殺せそう、 $q$  = すごい

4. 2. 5で見たように、隠喩は、(i)のように、 $\circ p (q)$ の形で表すことも、(ii)のように、 $q \circ (\phi)$ の形で表すこともできる。(i)の図式では $q$ が、(ii)の図式では $\phi$ が、喩えの部分である。

また、(2)の表現は、4. 2. 4で述べた「換喩的な隠喩」の例である。

#### 4. 4. 4 提喩的なツッコミ

##### 4. 4. 4. 1 提喩的なツッコミの概要

換喩的なツッコミが、事態の焦点化を行うのに対し、提喩的なツッコミは、事態の概念化にかかわるものである。

提喩的なツッコミのうち、「特殊」な事例を「一般」的な概念に結びつけるものを「一般化」のツッコミ、「一般」的な概念を「特殊」な事例に結びつけるものを「特殊化」のツッコミと呼ぶことができる。

実際には、そのような関係が、論理的に厳密に成り立っている必要はなく、「そこそこ」成り立っていれば、それを提喩とすることができる。

#### 4. 4. 4. 2 一般化と特殊化 1

下記の下線部のことばは、各要素を個別に提示する点では、換喩的ともいえるが、その一方で、それぞれが表す概念の包含関係が比較的是っきりしており、提喩的なツッコミとしての性格も強い。下線部のうち、(1) (2) は「一般化」、(3) は「特殊化」の例といえる。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ああ、あの結婚詐欺師か」

:  $q$  の提示 ( $\circ \subset q$ )

☆「あほ、詐欺師とちゃうわ」

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ああ、あの結婚詐欺師か」

☆「あほ、ふつうの人じゃ」

:  $p$  の提示 ( $\circ \subset p$ )

(3)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ああ、あの結婚詐欺師か」

☆「あほ、それは前の彼女や」

:  $\phi$  の提示 ( $\phi \subset q$ )

$\circ \text{ --- } (p)$

＼

$\phi \text{ --- } q$

○ = 彼女、      p = ふつうの人  
 ϕ = 前の彼女、 q = 結婚詐欺師

#### 4. 4. 4. 3 一般化と特殊化2

提喩的なツッコミの典型的なものは、q に対して ϕ を提示するものである。これには、下記のように、(i) (ii) の二つの場合がある。

|         |     |         |
|---------|-----|---------|
| ○ — (p) |     | ○ — (p) |
| \       | または | \       |
| (ϕ) — q |     | ϕ — q   |

(i)  $\phi \supset q$  の場合 (一般化のツッコミ)

(ii)  $\phi \subset q$  の場合 (特殊化のツッコミ)

(i) は、事態を抽象的なことばでまとめるツッコミである。下記の (1) のような例がある。

(ii) の場合には、ϕ が q の「説明」と見られる場合と、隠喩と見られる場合がある。q について、その原因や動機や正体を特定して提示するのが「説明」、q から別のものを想像するのが隠喩といえる。

「説明」と見られるのは、下記の (2) のような場合である。隠喩と見られるのは、4. 4. 3 で「隠喩的なツッコミ」として示したものである。

(i)  $\phi \supset q$  の場合

(1)

☆ 「これがぼくの彼女の写真やねん」

★ 「ふーん」

☆ 「これ、お前の知り合い百人に百通ずつ送信してくれへんか」

★ 「なんでやねん。」

たんなる嫌がらせやないか」 :  $\phi$  の提示 (一般化)

○ = 彼女の写真、p = 見る

$\phi$  = 嫌がらせ、q = 百人に百通ずつ送る

(ii)  $\phi \subset q$  の場合

(2)

☆ 「これがぼくの彼女の写真やねん」

★ 「ほう、なかなかきれいな人やないか」

☆ 「いや、その人やなくて、その後ろに立ってる半透明の人やねん」

★ 「心霊写真やないか」 :  $\phi$  の提示 (特殊化・説明)

○ = 彼女の写真、p = きれいな姿

$\phi$  = 心霊写真、q = 半透明の姿

4. 4. 2. 5で示したような、疑問詞を使ったツッコミは、提喻的なツッコミの一種と見ることもできる。たとえば(3)のような例は、相手に「説明」を求める文となっている。

(3)

☆ 「これがぼくの彼女の写真やねん」

★ 「ふーん」

☆ 「彼女、医者のおやねん」

★ 「へえ、賢いねんな」

☆ 「卵いても、転がる方やけどな」

★ 「なんやねん、転がる方って」 :  $\phi$  の提示 (説明要求)

○ = 卵、p = 前段階のもの

$\phi$  = 何、q = 転がるもの

4. 4. 4. 4 特殊化—説明と隠喩

4. 4. 4. 3で述べたように、 $\phi$ を提示するタイプの文で、 $\phi \subset q$ であるとき、 $\phi$ が $q$ の「説明」である場合と隠喩である場合がある。しかし、下記の(2)のように、「説明」と隠喩の両方の性格が見られるような場合もある。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★(写真を破り捨てる)

☆「おい、なにすんねん」

★「ああ、なんか無性に腹が立ってな」 : 説明

○ — (p)

＼

$\phi$  — q

○ = 彼女の写真、 p = 見る

$\phi$  = 無性に腹が立つ、 q = 破り捨てる

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★(写真を破り捨てる)

☆「おい、なにすんねん」

★「ああ、ごめん。悪魔の写真みたいやったから」 : 説明、隠喩

○ — (p)

○ — (d)

＼

＼

( $\phi$ ) — q

( $\phi$ ) — b

(2-1) ○ = 彼女の写真、 p = 見る

$\phi$  = 悪魔の写真、 q = 破り捨てる

(2-2) ○ = 彼女の写真、 d = 好ましいもの

$\phi$  = 悪魔の写真、 b = 忌まわしいもの

上記の(1)の場合、 $\phi$ は $q$ の「説明」であり、この場合、とくに、換喩的な

「説明」と見られる。換喩的な「説明」については、4. 5. 3で別に述べる。  
一方、(2)に関しては、(2-1) (2-2) の二つの関係が見てとれる。

(2-1) によれば、(1)と同様、 $\phi$  は  $q$  の「説明」といえる。これに対し、  
(2-2) によれば、 $\phi$  は  $\circ$  の隠喩と見ることができる。つまり、そこに  $\circ \subset b$ 、  
 $\phi \subset b$  の関係があって、 $b \circ (\phi)$  という隠喩が成立しているといえる。

#### 4. 4. 4. 5 一般化

下記のようなものは、「一般化」のツッコミの例といえる。すなわち、(1)の  
4～5行目 ( $\circ \subset \bigcirc$ 、 $\bigcirc \subset p\ 2$ )、(2)の4行目 ( $\circ \subset \bigcirc$ 、 $\bigcirc \subset p\ 2$ ) がそうである。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「こらまた、えらい顔やな。」

:  $q\ 1$  の提示

ケガニみたいやで」

:  $\phi$  の提示

☆「ケガニいうな、人間じゃ。」

:  $\phi$  の否定、 $\bigcirc$  の提示

ちゃんと縦に歩くちゅうねん」

:  $p\ 2$  の提示

$\bigcirc$  —  $p\ 2$

|

$\circ$  — ( $p\ 1$ )

＼

( $\phi$ ) —  $q\ 1$

|

( $\Phi$  —  $q\ 2$ )

$\circ$  = 彼女、  $p\ 1$  = ふつうの顔、  $\bigcirc$  = 人間、  $p\ 2$  = 縦に歩くもの

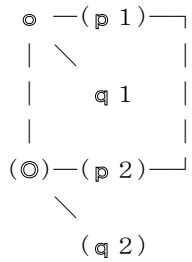
$\phi$  = ケガニ、  $q\ 1$  = すごい顔、  $\Phi$  = カニ、  $q\ 2$  = 横に歩くもの

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

:  $\circ$  の提示

- ★「なんやこれ、泣いとんのか」 : q 1 の提示
- ☆「あほ、わろとんねん」 : p 1 の提示
- ★「ふーん。 こんな女でも楽しいことあんねんな」 : ○、 p 2 の提示



○=彼女、 p 1=笑っている、 p 2=楽しいことがある  
○=彼女のような女、 q 1=泣いている、 q 2=楽しいことがない

4. 4. 5 比喩的条件文によるツッコミ

比喩的なツッコミには、条件文の形をしたものがある。条件文とは、前件と後件から成り、前件の事態の成立にしたがって、後件の事態が成立することを述べる文である。次のような例を挙げることができる。

| 例                     | 前件     | 後件     |
|-----------------------|--------|--------|
| 「お金が儲かれば、みんなが助かる」     | 望ましい   | 望ましい   |
| 「あなたが死ぬなら、私も死ぬ」       | 望ましくない | 望ましくない |
| 「君に社長が務まるなら、猿も大臣になれる」 | バカバカしい | バカバカしい |

言語学者の赤塚紀子さんによれば、自然言語の条件文では、前件と後件に対する話者の評価は、必ず一致するという。この場合の評価とは、上記のように「望ましい／望ましくない」「バカバカしい／バカバカしくない」といった選択肢から選択されるものである。前件と後件の評価が異なる文は、論理的にはありえても、自然な日常言語ではありえないということである(\*1)。

条件文の中でも、比喩的条件文とは、上表の最後の文のように、バカバカしいことが明白な事態を後件に配置することによって、前件もバカバカしい事態であることを示そうとする文である。次の例にも、比喩的条件文が含まれている。

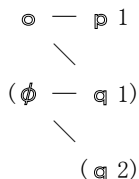
(1)

☆「これがぼくの彼女やねん」

★「こらまた、えらい顔やな。足の裏みたいやで」

☆「だれが足の裏やねん。

顔が足の裏やったら、本人がいちばん臭いやろ」



○=彼女、            p1=顔が足の裏ではない

φ=ありえない、 q1=顔が足の裏である、 q2=本人がいちばん臭い

上記の例では、前件がすでにバカバカしいが、後件にもバカバカしい事態を述べて、バカバカしさを強調している。

#### 4. 4. 6 比喩以外の技法によるツッコミ

比喩以外のレトリックによるツッコミとしては、「誇張法」「緩叙法」に相当する「大袈裟なツッコミ」「婉曲なツッコミ」、あるいは、4. 3で述べたことに関連する「形象形成的なツッコミ」などがある。

そのほかにも、ツッコミを行うべきときに行わないといった、ツッコミの運用にかかわる技法もある。たとえば、相手のボケに対する「受容」「看過」「無視」「沈黙」などの方法があるが、本書では言及しない。

## 4. 4. 6. 1 大袈裟なツッコミ、婉曲なツッコミ

必ずというわけではないが、大袈裟なツッコミは特殊化の提喩によって、婉曲なツッコミは一般化の提喩によって、行われることがある。つまり、これらも比喻表現と無関係ではない。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「でかい顔やなあ。

こんなもん、見終わるのに三日かかるわ」 : 誇張

○ = 彼女の顔、

p = ふつうの顔

φ = 見終わるのに三日かかる顔、q = 大きな顔 (φ ⊂ q)

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★ (大きな顔だと思いながら)

「なかなか存在感のある顔やね」 : 婉曲

○ = 彼女の顔、 p = ふつうの顔

φ = 存在感のある顔、q = 大きな顔 (φ ⊂ q)

## 4. 4. 6. 2 形象形成的なツッコミ

4. 3で紹介したベルクソン氏の理論が示しているような、注意の焦点を、会話の内容から会話の外形へと転位させるようなツッコミもある。

たとえば、漫才コンビのタカアンドトシの「欧米か」というツッコミは、これ自体は提喩的なツッコミの一種と考えられるが、それが反復使用されることで、また、相手の頭を叩くという身体的な要素も加わることで、独特のリズムを作り出すことができる。

その他、形象に特徴のある例として、下記の(1)では、対句的な表現によるツ

ツコミが見られる。(2)では、嘲りのツッコミと怒りのツッコミが交互に現れて、リズムを作り出している。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「うわ、長い鼻毛やな」

☆「あほ、鼻毛が長いんちゃう。鼻が短いねん」

○ —(p)

＼

q

○ = 長い鼻毛が見える、p = 鼻毛が長い、q = 鼻が短い

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「彼女の隣におるの、お前か。あいかわらずブサイクやな」

☆「ほっとけ」

★「髪の毛もないし」

☆「うるさい」

★「金もない」

☆「やかましわ」

★「背えも低いし」

☆「あほいえ」

★「知能も低い」

☆「いいすぎや」

★「そんなお前を愛せるのは、おれだけや」

☆「お前、そんなにおれのこと …」

○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 —(☆(★(p q P I) q Q I))

＼

☆(★(q d P III) d P III)

○ 1 = ブサイク、○ 2 = 髪がない、○ 3 = 金がない、○ 4 = 背が低い、○ 5 = 知能が低い

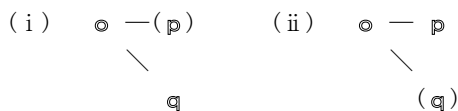
p = 蔑んでいる、q = 愛している

#### 4. 5 誤解、隠喩、説明

4. 5 では、4. 2～4. 4 で述べたことの補足を行う。4. 5. 1 では、4. 2. 4 で述べた「意外性」と隠喩の関係について補足する。4. 5. 2～4. 5. 3 では、4. 4. 4 で述べた「説明」的なツッコミについて補足する。

##### 4. 5. 1 誤解と隠喩

4. 2. 4 で述べたように、本書では、「意外性」は主に (i) の図式で、隠喩は主に (ii) の図式で表しているが、この二つの図式は、視点の置き方によって交替しうるので、この図式だけで、「意外性」と隠喩を区別することはできない。



隠喩と「意外性」の中間的なものに「誤解」があるが、「誤解」の場合を例にとって、それが (i) (ii) のどちらの図式でも表せることを説明する。

たとえば、下記の (1) では、★が「ホクロ」を「鼻くそ」と間違え、(2) では、★が「ホクロ」を「鼻くそ」にたとえている。つまり、(1) が「誤解」の例、(2) が隠喩の例である。

(1) の場合、★が本当に間違えているのか、間違えたふりをしているだけなのかはわからないが、ここでは、両方の場合を含めて「誤解」としておく。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「なんやこの黒いの。鼻くそか」 : 誤解

☆「あほ、それはホクロや」

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「なんやこの黒いの。ホクロか。鼻くそみたいやな」

: 隠喩

○ = 黒いもの、p = ホクロ、q = 鼻くそ

(1) の場合、★の発言内容に焦点を合わせた場合には、(ii) の図式で表すのが妥当である。黒いものが、現実には「ホクロ」なのに、それから「鼻くそ」を想像しているからである。

一方、★の発言行動に焦点を合わせた場合には、(i) の図式で表すのが妥当である。黒いものに対して、「ホクロ」と言うべき状況で、「鼻くそ」と言っているからである。

「誤解」は、このように (i) (ii) のどちらの図式で表すこともできる。しかし、4. 2. 4で述べたような、p、qの成立の排他性からいえば、それは「意外性」の範疇に入ると考えることができる。

#### 4. 5. 2 提喩的な「説明」

4. 5. 2～4. 5. 3では、4. 4. 4で言及した「説明」というプロセスについて補足する。「説明」には、提喩的なものと換喩的なものがある。まず、提喩的な「説明」の例として、4. 4. 4. 2で示した事例をあらためて示す。

(1)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ああ、あの結婚詐欺師か」

☆「あほ、ふつうの人じゃ」

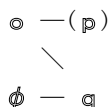
: 説明 (○ ⊂ p)

(2)

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ああ、あの結婚詐欺師か」

☆「あほ、それは前の彼女や」 : 説明 ( $\phi \subset q$ )



$\circ$  = 彼女、  $p$  = ふつうの人

$\phi$  = 前の彼女、  $q$  = 結婚詐欺師

(2) の場合、 $\phi$  が  $q$  に対する「説明」となっている。 $\phi \subset q$  であるから、「特殊化」の表現といえる。

一方、(1) の場合、 $p$  が  $\circ$  に対する説明となっている。 $\circ \subset p$  であるから、「一般化」の表現といえる。

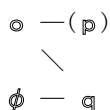
ただし、(1) の場合、下記のように、「彼女」という対象に対しては「一般化」が行われているが、「人」という概念に対しては「特殊化」が行われているといえる。「説明」の要点は、この「特殊化」の部分にあると考えられる。

「彼女」 $\subset$ 「ふつうの人」 $\subset$ 「人」

したがって、どちらの場合にも、非限定的なものが限定されることによる、ある種の「収束感」がともなっており、これが「説明」というプロセスに共通するイメージだといえる。このイメージは、4. 5. 3 で述べるような、換喩的な「説明」の場合にも共通するものである。

#### 4. 5. 3 換喩的な「説明」

「説明」とは、概念間の関係づけのことであり、基本的には、提喩的な操作である。しかし、因果関係の「説明」などには、換喩的な要素が含まれる。因果関係の「説明」とは、典型的には、下記の図式において、 $\phi$  が  $q$  の原因として提示されるものである。



喜劇などの場合、事態が  $\phi$ 、 $q$  の順に提示されることが多いのに対し、推理小説などの場合は、 $q$ 、 $\phi$  の順に提示されることが多い。つまり、 $q$ （結果）が先に示され、 $\phi$ （原因）が後から示されるという形である。

次の事例でも、 $\phi$  が原因、 $q$  が結果の関係になっていて、 $\phi$  が  $q$  を説明する形になっている。

(1)

- ☆「これがぼくの彼女の写真やねん」
- ★「ああ、知ってる。お前の先輩の奥さんで、  
週一回のペースで密会してる人やろ」
- ☆「なんでそんなこと知ってんねん」
- ★「お前がブログに書いてたからや」 : 説明

$\circ$  = 密会の情報、 $p$  = 知られていない  
 $\phi$  = ブログに書いた、 $q$  = 知られている

(2)

- ☆「これがぼくの彼女の写真やねん」
- ★「なんか、涙ぐんどるな」
- ☆「たこ焼きが熱かってん」 : 説明

$\circ$  = 彼女、 $p$  = 涙ぐまない  
 $\phi$  = 食べたたこ焼きが熱い、 $q$  = 涙ぐむ

因果関係は、時間にかかわる換喩的な関係の一種であるが、それを「因果」という枠組みでとらえるのは、概念上の操作であり、提喩的な側面があるといえる。

上記の事例の  $\phi$  と  $q$  の関係も、下記の（1 a）（2 a）のように、事態間の関係

上記のような  $\phi$  と  $q$  の関係は、100%成り立つわけではないが、一定の確率では成り立つので、現実的には有効な主張といえる。

一方、下記の例では、 $\phi$  と  $q$  に、そのような関係自体がほとんど成り立ちえない。このような「説明」は「変な説明」というべきものであり、ツッコミというよりボケと認識される。

☆「これがぼくの彼女の写真やねん」

★「ははあ、最近、猫がえさ食わん思たら、

そんなもん撮っとったんか！

: 変な説明

☆「なんの関係があんねん」

◎ = 猫、

**p** = えさを食べる

$\phi$  = ☆が交際相手の写真を撮る、 $q$  = えさを食べない

#### 4. 6 4 のまとめ

4では、「意外性」にかかわることばのはたらきについて述べた。

4. 1では、ことわざに現れる「意外性」について述べた。

4. 2では、「意外性」と比喩の関連について述べた。「意外性」は、換喩または提喩に基づく認知形式であり、隠喩とも一定の関係をもつことを述べた。

4. 3では、ベルクソン氏の笑いの理論と、「形象優位性」という現象について述べた。

4. 4では、ツッコミのレトリックについて、漫才風の会話文を示しながら、考察を行った。ツッコミの機能を、換喩的なもの、提喩的なものに分けて論じた。

4. 5では、「意外性」と隠喩の関係について補足した。また、「説明」という概念について補足した。

## 【参考文献】

## 1. 2

\*1 ティンバーゲン, N., 丘直通訳 (1969) 『ライフ大自然シリーズ9 動物の行動』 ライフ編集部編, タイム・ライフ・インターナショナル.

## 2. 1

\*1 山田寛 (2001) 「表情によるコミュニケーション」 『認知科学の新展開 2 コミュニケーションと思考』 乾敏郎・安西祐一郎編, 岩波書店.

\*2 ローレンツ, K., 日高敏隆・久保和彦訳 (1970) 『攻撃—悪の自然誌 1, 2』 みすず書房. [原著 Lorenz, K. (1963) *Das sogenannte Böse :Zur Naturgeschichte der Aggression*]

## 2. 2. 1

\*1 フランク, R. H., 山岸俊男監訳 (1995) 『オデッセウスの鎖—適応プログラムとしての感情』 サイエンス社. [原著 Frank, R. H. (1988) *Passions within Reason :The Strategic Role of the Emotions*]

## 2. 2. 4

\*1 グドール, J., 杉山幸丸・松沢哲郎監訳 (1990) 『野生チンパンジーの世界』 ミネルヴァ書房. [原著 Goodall, J. (1986) *The Chimpanzees of Gombe :Patterns of Behavior*]

## 3

\*1 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』 くろしお出版.

\*2 アスティントン, J. W., 松村暢隆訳 (1995) 『子供はどのように心を発見するか—〈心の理論〉の発達心理学』 新曜社. [原著 Astington, J. W. (1993) *The Child's Discovery of the Mind*]

## 3. 1. 1

\*1 パウロス, J. A., 橋本英典訳 (1982) 『数学とユーモア』 紀伊國屋書店. [原著 : Paulos, J. A. (1980) *Mathematics and Humor*]

## 3. 1. 2

\*1 桂枝雀 (1993) 『らくごDE枝雀』 ちくま文庫.

## 3. 2. 2. 1

\*1 パウロス, 前掲書.

\*2 桂枝雀, 前掲書.

\*3 谷泰 (2004) 『笑いの本地、笑いの本願—無知の知のコミュニケーション』 以文社.

## 3.2.2.4

\*1 大島希巳江 (2006) 『日本の笑いと世界のユーモア—異文化コミュニケーションの観点から』世界思想社.

## 3.2.2.11

\*1 パウロス, 前掲書.

## 3.2.3

\*1 高橋由典 (1996) 『感情と行為—社会学的感情論の試み』新曜社.

## 3.2.3.1.2

\*1 菅原健介 (1998) 『人はなぜ恥ずかしがるのか—羞恥と自己イメージの社会心理学』サイエンス社.

## 3.2.3.3

\*1 畑田国男 (1994) 『三角関係の超・心理』毎日新聞社.

## 3.2.3.5

\*1 佐藤泉 (2002) 『漱石 片付かない〈近代〉』日本放送出版協会.

## 4.2.1

\*1 小泉保 (1997) 『ジョークとレトリックの語用論』大修館書店.

\*2 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』講談社.

\*3 瀬戸賢一 (1997) 『認識のレトリック』海鳴社.

\*4 グループ  $\mu$ , 佐々木健一・樋口桂子訳 (1981) 『一般修辞学』大修館書店.  
[原著 Le groupe  $\mu$  (1970) *Rhétorique générale*]

## 4.2.2

\*1 樋口桂子 (1995) 『イソップのレトリック—メタファーからメトニミーへ』勁草書房.

## 4.2.5

\*1 グループ  $\mu$ , 前掲書.

## 4.3

\*1 ベルクソン, H., 林達夫訳 (1938) 『笑い』岩波文庫. [原著 Bergson, H. (1900) *Le rire*]

## 4.4

\*1 大島, 前掲書.

## 4.4.5

\*1 赤塚紀子 (1998) 「条件文と Desirability の仮説」『日英語比較選書 3 モダリティと発話行為』赤塚紀子・坪本篤朗著, 中右実編, 研究社出版.